

人工種苗の放流効果調査 2（出雲海域）

（栽培漁業事業化総合推進事業）

清川智之

1. 研究目的

放流マダイ、ヒラメの出雲海域における効果の検証と放流事業の普及啓発を目的とする。なお、この調査は出雲海域だけでなく、全県で調査が実施され、本場が石見海域で、栽培漁業センターが隠岐海域で調査を行う。また、各海域で県水産振興協会と共同で調査が行われている。

2. 研究方法

漁獲統計調査の対象漁協は美保関町漁協から大社町漁協までの出雲海域の 7 漁協である。

市場調査は当海域のマダイ、ヒラメをおよそ 10%以上漁獲する沖底、小底 1、2 種などの漁業種を対象とし、恵曇漁協、大社町漁協、および松江魚市、境港魚市で調査を行った。また、ヒラメについては島根県水産振興協会が平田市漁協に委託した調査結果も併せて用いた。

放流魚の確認は、マダイは鼻孔異常（鼻孔隔皮欠損）を、ヒラメは無眼側の色素異常を肉眼観察により行った。

3. 研究結果

（1）マダイ

市場調査により延べ 3,685 尾のマダイを測定した。測定されたマダイの尾叉長は 12～73 cm の範囲にあったが、中でも尾叉長 20～40 cm の 2～4 歳魚の占める割合が 80% を占めた。そのうち、鼻孔異常魚は尾叉長 18～70 cm の個体で、計 64 尾が確認された。放流時の鼻孔異常割合から放流魚の混獲率は 3.7% と推定された。

これにより、当海域のマダイの総漁獲量は 192.6 トン、水揚金額は 1 億 8,787 万円で、このうち放流マダイは 6.0 トン、水揚げ金額 692 万円と積算された。放流魚は 2、3 歳魚が特に多かった。

（2）ヒラメ

市場調査により延べ 2,816 尾のヒラメを測定した。本県のヒラメの制限体長は全長 30cm（小底 2 種は 25cm）となっているが、市場調査で測定されたヒラメの全長は小底 2 種では 30～40cm、それ以外では 40cm 以上の個体が大半を占めており、ほぼ制限体長は遵守されていると判断された。

無眼側色素異常魚（黒化魚）については、沖合底びき網が 5.3%、小型底びき網 1 種が 5.6%、小型底びき網 2 種が 3.8%、その他の漁業（定置網・釣・刺網）では 4.9% で、合計 146 尾が確認され、平均混獲率は 5.2% と推定された。

これにより、当海域のヒラメの総漁獲量は 52.2 トン、水揚金額は 8,443 万円で、このうち放流ヒラメは 2.3 トン、水揚げ金額 3,573 万円と積算された。ヒラメ放流魚は小型底曳網 2 種で若齢魚が多かったものの、それ以外の漁法では若齢魚から高齢魚まで幅広く確認されており、当海域における放流ヒラメの生残率は高いものと思われる。

4. 研究成果

調査結果は「平成 12 年度栽培漁業事業化総合推進事業マダイ、ヒラメ放流効果調査報告書」で報告され、これを基に県水産振興協会が漁業者向け普及パンフレットが作成される。